

2025 年度テイヤール・ド・シャルダン奨学金懸賞論文

分断の深まる時代の「研究における精神の自由」とは

分断深まる時代のなかで「研究における良心の自由」を求めて ——カントとテイヤール・ド・シャルダンの思想を手がかりに——

C1921470 森 良太（もり りょうた）

文学研究科 哲学専攻

【要約】

本稿は「研究における精神の自由」を特に良心の観点から照射し、同時にこれを社会の分断の問題と絡めて論じるものである。その考察には、カントとテイヤール・ド・シャルダンの思想を援用する。本稿の論述は、以下のように展開される。

第 1 に、カントの良心概念が自己の内部の形式と「共に知る」という「形式的良心性」と、自己の外部の実質と「共に知る」という「実質的良心性」に分類されることを確認する。第 2 に、テイヤールにおける良心を宇宙の道徳的進化と「共に知り」、かつ自由にこれに従うという「進化的良心性」として見定める。第 3 に、良心の類型をアメリカ合衆国における保守派とリベラル派の分断状況に適用し、その問題の本質を両派の「実質的良心性」として規定すると共に、両者の抑圧の犠牲となった研究者の「形式的良心性」も併せて指摘する。第 4 に、テイヤールの文脈にあってはドグマ化した保守派やリベラル派も、その抑圧的なエゴイズムを乗り越え、人類の「省察力」として宇宙全体の道徳的進化に参加する機会に与りうることを論じる。そしてその根底には、全ての人格を含む宇宙の自動的な統一の流れと「共に知る」ところの「進化的良心性」が息づいていることを示す。第 5 に、筆者自身の今後の研究活動の基点として、たんなる批判の応酬に陥る「実質的良心性」を避けつつ、さらに巨視的に人類としての学問の進化と「共に知る」という「進化的良心性」を呈示する。分断深まる時代にあっても「研究における良心の自由」を保つ基盤を、筆者はこうした点に求める。

はじめに

筆者は分断深まる時代の「研究における精神の自由」の礎となるべきものを、良心として見定める。というのも良心こそが、道德の問題に最も鋭敏に関わるからである。精神とは広義には、思考・感情・意志を統合する能力であるが、良心はその中でも特に道德的判断に関わるものとして狭義的に位置づけられている。そして分断状況のなかにあって研究活動の指針となるべきものは、特定の勢力の恣意性に左右されず、進むべき方向性を見出していくという意味での道德的判断でなければならない。本稿では、かかる判断を可能にするものを善き意味での良心として捉える。

その良心に従う自由が与えられる存在者は、人間のみである。しかし自由であるがゆえに、人間は善ばかりでなく悪にもなびくことができる。もし悪に傾いた場合には、その人間は分断を惹き起こす側に加担することにもなりかねない。したがって良心の自由とは諸刃の剣であることが、銘記されねばならない。

哲学者イマヌエル・カント（1724－1804）は、このような道德的問題について考え抜いた者であった。また古生物学者にしてカトリック司祭であるティヤール・ド・シャルダン（1881－1955）の思想の骨格をなすものも、道德的な宇宙進化である。このふたりの思想をもとに、本稿は以下のように論題の考察を進める。まず両者からどのように良心の自由の問題が構成されるかを呈示し（第1節・第2節）、これを社会の分断の事例に適用して吟味した上で（第3節）、分断を乗り越える良心のあり方を探っていく（第4節）。そして最後に哲学を専攻する筆者自身の研究活動における、良心の自由を保つ基盤を呈示してみたい。

第1節 カントにおける良心の自由

伝統的な西洋思想のなかで良心は、「共に一知る（羅：con-scientia、独：ge-wissen）」という語義を示すものである。カントは1791年の論文「弁神論における一切の哲学的試みの失敗」において、良心のあり方を「形式的良心性」として表明する¹。これは自己の内部の形式と「共に知る」という、反省的な良心である。その根幹には自己が内的道德性に基つき、自由に自己立法し、同時に自由に従うという、自律的な形式が存している。こうした良心の自由は、1785年の著作『道德形而上学の基礎づけ』における自律的な人格概念²を引き継ぐものでもある。その反対に自己の（内部ではなく）外部の実質と「共に知る」という依存的な良心のあり方は、「実質的良心性」といわれる³。これは他律的な良心の自由へと墮するものであり、自律的人格とは接続しないため、悪しき良心性として位置づけられている。

カントはこうした良心を巡る問題を、旧約聖書「ヨブ記」から例をとって説明する。彼の

¹ *Über das Mißlingen aller philosophischen Versuche in der Theodicee*, S. 268.

² *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*, S. 438.

³ *Über das Mißlingen aller philosophischen Versuche in der Theodicee*, S. 268.

「ヨブ記」解釈によれば、不条理に見舞われても自己の内の真実を訴えるヨブには「形式的良心性」が認められ、その正当性は自由な自己立法の形式（自律）に求められる。これに反してヨブと論争する彼の友人たちは、自己の外にある神の権威におもねる他律的な「実質的良心性」の誤りを犯していると批判されている⁴。

その論述の背景には、カントの生きた近代黎明期に特有な時代状況が息づいている。これは彼の 1784 年の論文「啓蒙とは何か」では、人間が伝統的な権威から解放され、理性を自由に使用する啓蒙の時代として描写されている⁵。また彼は 1787 年の主著『純粋理性批判』第 2 版では、（ヴォルフらによる）「独断論的（dogmatisch）」な形而上学を自らの敵として警戒する⁶。カントによれば彼らは、理性の吟味を経ることなく（神という権威の）超越性を正当化する独断論的（ドグマ的）な者、つまり「実質的良心性」に陥る者に他ならない。その反対に彼は、「形式的良心性」のもとに反省し、ドグマに陥ることなく自由に思考するような自律的人格を、新しき啓蒙の時代の理想として訴えているのである。

では時を下って、ティヤールは良心の自由についてどのように考えていたのであろうか。

第 2 節 ティヤールにおける良心の自由

ティヤールは、1917 年の書簡のなかで次のようにいう。「聖化の営みのなかに、いっさいの地上的生命を本能的に活気づける […] 全ての精神を導き入れなければなりません」⁷。これは「進化の営みを自由に […] 若干は盲目的に延長していく」ことであり、また「宇宙の道德化」、「思考を生まれしめた営みの真の延長」ともいわれている⁸。このように若き日のティヤールは、精神を宇宙の道德的進化を生命的に活気づけるものとして、また自由を思考の進化（延長）の営みに従うものとして考えている。ここには既にティヤールの思想の基本骨格が認められよう。

とはいえ未だ明瞭にならないのは、盲目的な延長といわれるものの内実である。その解明には、更なる研鑽を積んだティヤールの成熟を待つべきなのであろう。彼の死後 1955 年に出版された主著『現象としての人間』には、以下の記述がみられる。「集団の孤立は、われわれにたいして精神圏のほんとうの輪郭を隠すか、歪めるようになるし、また真の地球的な精神の形成を妨げるようになる」⁹。けだし盲目的な延長とは、真の精神形成の妨げになる集団の歪みなのである。この歪みは特に、社会的な連関において言及される。曰く、「社会的変革に至るまで、世界の趨勢は、われわれ各人を人間集団のえたいの知れない沸騰の奴隷

⁴ *a.a.O.*, S. 265.

⁵ *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?*, S. 40.

⁶ *Kritik der reinen Vernunft*, S. XXX.

⁷ 『ある思想の誕生』235 頁。

⁸ 同著 236 頁。

⁹ 『現象としての人間』283 頁。

にしてしまう」¹⁰。しかし彼はある意味で楽観的であり、盲目的な歪みを経てこそ、社会は統合に向かうとも考える。すなわち「社会のメンバーにも […] 結合によって分化が現れてくる。各分子〔人間〕は組織される統一体のなかで改善され完成される」¹¹のである。こうした分化と共立する統合が、宇宙の道徳的進化に直結していることはいうまでもない。

そして統合を生命的に活気づける精神は、人格の確立ともいわれる。これは「生命的立場」からは「宇宙が唯一無比の仕方では自己集中している真に独創的な中心—まさにわれわれの自我、人格—を、われわれ各人でおのれ自身の内に確立すること」¹²と説明される。すなわち宇宙の自己集中という統合は、生命活動において人格を確立する精神と同期するのである。さらにこうした人格の確立は「高次の思考力、すなわち高次の人格化」¹³ともいわれ、思考との連関性が示される。ここで想起されるべきは、思考の延長（としての宇宙の道徳的進化）に従うという、ティヤールにおける良心の自由のあり方である。すなわちティヤールにあっても（カントと同様に）人格の確立は、思考と自由に関わる良心の問題として構成されるのである。但しティヤールの良心概念を先の分類図式に当てはめても、カントのように内的形式と「共に知る」良心と、外的実質と「共に知る」良心とに区分されることはない。というのもここでの良心は、内部と外部の区分なしに、宇宙の道徳的進化と「共に知り」、思考し、自由にこれに従うというあり方をもつからである。本稿ではこれを「進化的良心性」と命名したい。

もっともティヤールはこうした事柄について、カントのように例を挙げて説明している訳ではない。そこでわれわれは次節以降で、現代社会から事例を借用しつつ、ティヤールの「進化的良心性」について更なる考察を試みる。

第3節 研究の場にみられる分断

社会の分断ということで想起されることのひとつは、近年の米国における保守とリベラルの対立状況であろう。殊に研究という領域に関しては、保守派の牙城であるトランプ政権が、反ユダヤ主義運動の撲滅を契機として、リベラルを標榜する大学への介入を強めたことが記憶に新しい。特に同政権が名門ハーバード大学に対して助成金の打ち切りや留学生受け入れ中止を通告したことが、物議を醸した。たしかに政治権力が自由な学問研究の場に恣意的に介入することは、断じて許されるものではない。

とはいえ本稿では、その逆の観点も含めて考えてみたい。実は第2次トランプ政権が発足する前の民主党政権時に、ハーバード大学内部でも研究の自由をめぐる対立が生じていたようである。同大学で人類生物学を教えていたキャロル・フーベン氏は、教授陣から「男

¹⁰ 同著 306 頁。

¹¹ 同著 314 頁。

¹² 同著 313 頁。

¹³ 同著 309 頁。

性」「女性」「妊婦」といった語の使用を避けるよう圧力をかけられていた¹⁴。また「性別は生物学的には男女ふたつしかない。生殖細胞の種類によって決まる」という彼女の発言が問題視され、最終的には彼女は 2023 年に教職を辞した。DEI（多様性、公平性、包括性）¹⁵といわれるリベラル的理念を標榜する学内の方針が、こうした（保守的にみられる）発言を許容しなかったようである¹⁶。これはトランプ政権とは反対の意味での抑圧事象であろう。但しフーベン氏は、教員は社会的反発を恐れてその言説を変えるべきではないとも述べている¹⁷。その表明の限りでは、彼女は「形式的良心性」に従う科学者というべきであろう¹⁸。

さて第 1 節でのカントの分類を用いれば、上記の分断図式は以下のようにまとめられる。すなわち①保守派のドグマと「共に知る」という「実質的良心性」と、②リベラル派のドグマと「共に知る」という「実質的良心性」との対立構図である。同時にそのいずれにも関与しない学生やフーベン氏の「形式的良心性」が、争いに巻き込まれたことも特筆されるべきであろう。自律的に学問を志す学生は①によって研究活動を妨害され、生物学研究の成果を公表したフーベン氏は②によってハーバードでのキャリアを終えた。このようにドグマ的に肥大した「実質的良心性」は、社会の分断を加速させるだけではなく、「形式的良心性」を潰す危険性を孕むものでもある。これはティヤールが指摘するところの、精神形成の妨げになる社会集団の歪み（盲目的な延長）に他ならない。

その歪みは矛盾したエゴイズムという形で現れる。過激な保守的エゴイズムは愛国精神を主張しながらも、自国の学問の発展を阻害している。また極端なリベラルのエゴイズムは寛容性を訴求しながらも、男女の性的個性の主張に対しては寛容ではない。両者は共にその自己中心的な言動において自己矛盾を犯しており、カント的観点からみても首尾一貫した反省的・自律的人格性を有するものではない。たしかにハーバード大学も採用した DEI の理念自体は人格的ともいえようが、その内実が体现されなければ真の人格性は成立しない。多様性の内で選り好みするような矛盾したリベラル主義は、既にその公平性と包括性を失っているといわざるをえない。

しかしティヤールは、社会の分断こそが人類の統合への過程であると述べていたのであった。では彼の文脈にあつては、統合はどのようにして可能となるのであろうか。

¹⁴ <https://www.aei.org/op-eds/why-i-left-harvard/>（最終閲覧日：2025 年 11 月 30 日）。

¹⁵ Diversity、Equity、Inclusion の頭文字をとった略号を指す。

¹⁶ <https://www.foxnews.com/media/former-harvard-lecturer-defended-biological-sex-claims-school-failed-support-career-crumbled>（最終閲覧日：2025 年 11 月 30 日）。

¹⁷ https://www.thecrimson.com/article/2021/8/11/biology-lecturer-gender-comments-backlash/?utm_source=chatgpt.com（最終閲覧日：2025 年 11 月 30 日）。

¹⁸ ここでフーベン氏の生物学上の学説が「進化的良心性」とも連関するのか、という論点を提起したい。著書『テストステロン』をみる限りでは、彼女の展開する学説は（ティヤールと同様に生命の進化を基点とするものではあるが）ティヤールのような究極点に向かう目的論的な観点をもたない。むしろその主張点は、テストステロン（男性ホルモン）に基づいた生物の行動特性の適応にある（例えば同書 223 頁では、テストステロンは交尾の機会を獲得するための暴力的競争に向け男性を進化的に適応させるという）。その限りでは彼女の学説は、ティヤールの意味における良心性との接点をもちえないのではないか。

第4節 分断を乗り越える「進化的良心性」

テイヤールによる社会の分断を乗り越えるあり方は、1959年に出版された『人間の未来』では次のように言及されている。曰く、「人間の分裂という忌まわしくも混沌たる現象が、われわれを苦しめ悩ませている。しかしそれを越えたところに、自動的な統一の力がますますはっきりと現れてきている」¹⁹。先にみた道徳的な宇宙進化が、ここでは「自動的な統一の力」と呼ばれている。そしてテイヤールはその自動的な進化の段階を以下のように分類する。すなわち、①物質的宇宙における生命現象の本質、②生物学的世界における「省察（人間）」の高次の生命形態、③人間世界における「省察の進歩」を示す社会、④人間組織におけるキリスト教という社会化の軸、である²⁰。これに則れば社会の分断は、①の生命現象から②の「省察」的生命への精神化を経て、③の「省察の進歩」における一時的な歪みの段階にあるものといえよう。その「省察」の発展の最終形態が、④のキリスト教的な社会化であり、やがて宇宙と人類の究極的収斂点としてのオメガ点²¹に連なるものである。

上述で着目されるべき概念は、人間の現象としての「省察（Réflexion）」である。『人間の未来』の「訳者あとがき」によれば、Réflexion という語には「反省（力）」と「洞察（力）」のふたつの機能の合成としての「省察（力）」というニュアンスが認められ、かつ生物進化が収斂に向けて内曲していく事象を示すという²²。これに従えば宇宙の道徳的進化とは、収斂点（オメガ点）に向けて自動的に内側に「反省（省察）する力」である。ここで第2節の議論を踏まえれば、その「反省力」とは生命を基点とした宇宙進化（思考の延長）と「共に知る」という自由な良心に他ならない。そして良心としてはたらく精神は、高次の人格を確立し、高次の思考力という「洞察（省察）力」となり、宇宙全体を巻き込む「自動的な統一の力」と同期する。さらにここからテイヤールにおける人格が、他の全ての人格を含んだ宇宙の道徳的進化と「共に知る」という「進化的良心性」を有することが明らかとなる。

これはカントの「形式的良心性」にはみられない考え方である。彼には論敵の独断論者や他律的な者たちと共に進化するという発想はない。先の「啓蒙とは何か」によれば理想的な共同体とは、理性を公に用いる自律的人格のみが参加できる市民社会である²³。これは全ての他者と進化を共にする宇宙的な共同体ではない。しかし他方でテイヤールの立論に則れば、カントの自律的な「形式的良心性」を可能にするものこそが「進化的良心性」とであるといふべきであろう。というのは自律的な道徳性すらも、宇宙の道徳的進化の流れに既に内包されているからである。よってカントの場合とは異なり、ここでは全ての人格はその道徳的進化の統合的な流れの中で成長する。すなわち「いかなる分子〔人間〕も他の全ての分子と

¹⁹ 『人間の未来』 362 頁。

²⁰ 同著 266 頁。

²¹ 『現象としての人間』 310 頁。

²² 『人間の未来』 399 頁。

²³ *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?*, S. 37.

共に、また他の全ての分子によってのみ、動き、そして成長する」²⁴のである。

ここで第 3 節で挙げた事例を敷衍してみたい。カントの理想的な市民社会には、ドグマ化された保守派やリベラル派は参加することはできない。むしろ彼らの抑圧に苦しみつつも、真理と「共に知る」自律的な学者がその参加を望みうるであろう。他方ではテイヤールの「進化的良心性」に基づく社会は、抑圧側も含めて、全人類でオメガ点に収斂していくものである。では彼の文脈では、抑圧者の歪んだエゴイズムはどのように扱われるのであろうか。テイヤールはいう。「エゴイズムの唯一の過ち、しかも致命的な過ちは、個性と人格を取り違えることである」²⁵。この場合の個性とは悪い意味でいわれ、「他の〔反対〕分子からできるだけ遠さかろうと努めること」²⁶をさす。筆者はこの悪しき個性に、ドグマによる他者抑圧の契機も付け加えたい。こうした個性と対極をなすものが、「他の全ての分子と共に一点〔オメガ点〕に向かって集中する」²⁷という（たんなる自律性を超えた）統合的な人格である。ここで重要になるのは、「真の自我〔人格〕はエゴイズムに反比例して成長する」²⁸といわれる契機である。そしてその基点となるものが、他人格を含む宇宙進化と「共に知る」ところの「進化的良心性」に他ならない。かかる宇宙的な良心の場においてのみ、分断をもたらす保守派やリベラル派もその極大化したエゴイズムを克服しうるばかりではなく、むしろ「反比例」的にその力が統合的な「省察力」となり、道徳的に進化する機会に与りうるのである²⁹。こうした「進化的良心性」からの成長の内にこそ、先の DEI の理念の真の成立可能性を見出すことができるのではないだろうか。というのもそこでは、全ての人格の多様性が公平に「省察」され、宇宙進化の流れに自動的に包括されるからである。

おわりに

学問研究は特定のドグマに加担せず、真理とのみ「共に知る」ところの「形式的良心性」の自由に基づかねばならない。他方で研究活動のなかでは、自説と対立する学説に遭遇することは日常茶飯事である。のみならず他説に反駁することによって、自説の正当性を強化することも研究上のひとつの有効な手段ではあろう。これは学問における批判精神の自由を

²⁴ 『人間の未来』 291 頁。

²⁵ 『現象としての人間』 315 頁。

²⁶ 同 316 頁。

²⁷ 同上。

²⁸ 同上。

²⁹ フーベン氏は心理学者との対話形式による web 公開エッセイのなかで、テストステロンが男女における攻撃性の性差を生み出している事実を踏まえた上で、公正な社会の実現は文化の活用によって可能であるという。<https://aeon.co/essays/a-psychologist-and-biologist-debate-the-significance-of-testosterone>（最終閲覧日：2025 年 11 月 30 日）。しかしこの説にあっては、エゴイズムによる攻撃性は尚も残存し、「反比例」的な統合の要素を認めることはできない。よって彼女の学説は、社会の分断の乗り越え方に関しても、テイヤールの立論とは異なるものといわざるをえない。

保つためにも、必ずしも否定されるべき事柄ではない。しかし研究の主目的が自己防衛と他者批判に向かえば、そこでは自己批判精神が失われ、自説も自律性の欠落したドグマと堕してしまうのではないか。昨今の哲学系の学会においても、“批判のための批判”といった類の解釈論争に出くわすことがある。ここには学問の発展に寄与するはずの「形式的良心性」が、(真理ではなく) ドグマ化された自説 (あるいは学派) と「共に知る」ところの「実質的良心性」へと転落する危険性が潜んでいる。その転落先では研究者は自由な真理探究の精神を喪失し、盲目的で歪んだエゴイズムに陥り、やがて学問上の分断状況が出来するであろう。

しかし各々の研究者もまた、一個の人格である。その意味では人格としての研究者には、論敵の人格を顧み、その学的視座を批判的に吸収し、自己自身への批判も含めて「反比例的」に学び合いながら成長していく道があってもよいのではないか。そこではじめて「形式的良心性」だけではなく、人類としての学問の進化と「共に知る」という「進化的良心性」の自由が開かれてくるのではないだろうか。そして他の研究者と共に進化した「省察力」のもとに、各自がより良い学説を練り上げていくことも不可能とはいえまい。世界的にみれば社会の分断は更に拡大していく様相を呈しているが、そのなかでも筆者は「研究における良心の自由」を保つ基盤をこうしたささやかな地点に求めていきたいと考える。

[凡例]

テキスト引用内の〔 〕は筆者による補いであり、傍点は筆者による付与である。また引用に際し、筆者が省略した部分は〔…〕と表記した。

[文献]

Kant, Immanuel, *Beantwortung der Frage: Was ist Aufklärung?*.

———, *Grundlegung zur Metaphysik der Sitten*.

———, *Kritik der reinen Vernunft*.

———, *Über das Mißlingen aller philosophischen Versuche in der Theodicee*.

ティヤール・ド・シャルダン、1969、『人間の未来』(ティヤール・ド・シャルダン著作集 7)、伊藤晃／渡辺義愛訳、みすず書房。

———、1969、『ある思想の誕生』(ティヤール・ド・シャルダン著作集 8)、山崎庸一郎訳、みすず書房。

———、2011、『現象としての人間 新版』、美田稔訳、みすず書房。

フーベン、キャロル、2024、『テストステロン: ヒトを分け、支配する物質』、坪井貴司訳、化学同人。